

ペルー プラスチックフィルムの利用で豪雨の後でもブドウを収穫

ASIAFRUIT 2023年4月5日

230mmの降雨もペルーの生食用ブドウの二期作を止められない

「雲が見えたら裂果する」というのは、古い世代の生食用ブドウ品種に関する格言であった。現在ペルーでは、230mm以上の降雨にもかかわらず、特別に設計されたプラスチックフィルムを使用することで、良好な二期作(二回目の収穫)が可能である。セロプラスト(SerroPlast)社が設計施工したオーダーメイドのプラスチックフィルムはチリでも使われており、ブドウだけでなくブルーベリーやサクランボなど他の主要な輸出作物でも、雨、風、過剰な日射といった最も困難な気象要因を制御するために使用されている。



ペルーとチリを担当する南米セロプラスト社のセバスチャン・エスカローナ製品部長によると、それは単に古いプラスチックフィルムを張って果実を覆うだけではない。(以下「」は同部長の発言)

「ピウラ県の2023年のケースでは、230mm以上の降雨の後、211ヘクタールで輸出用の4,500トンの収穫が始まっている。果実はうまく育っており、裂果や房腐れに関する問題は最小限である。果実の生育を比較するために、一部の限られた面積が被覆なしで残されているが、ここでは損失が85%以上となっている。まずは、この雨の背後にある状況を理解することだ。それは今年の2月に始まったので、晩生のブドウ(イカ県の場合)と二期作(ペルー北部のピウラ県の場合)の場合でのみ問題を引き起こした。どちらも3月から4月にかけて各農場で少量だけ収穫されるものである(収穫の大部分は10月から1月に集中している)。弊社のプラスチックフィルムはペルーで合計1,576ヘクタールをカバーし、そのうち211ヘクタールが晩生品種と二期作に使用され、イカ県の16ヘクタールとピウラ県の195ヘクタールで使用されている。」

ペルーで使用されるプラスチックフィルムは、品質、植物の活力、生産量の向上、収穫の早期化、節水、農薬の削減など、さまざまな目的で使用されているが、降雨からの保護は最も重要な目的の一つである。「12月から4月にかけては、雨のリスクが劇的に高まり、果実の損傷と病害(房腐れやべと病)の可能性が高いために、何らかの保護システムなしにブドウを生産出荷することは非常に困難である。さらに、一部の生産者は「二期作」(10月と4月)を始めており、量と品質を確保するためにプラスチックフィルムの使用は必須である。」



過去数年間、ペルーとチリの生食用ブドウの収穫期に雨が深いというパターンは、生産出荷業者に多くの課題を生み出した。「気候の変動は無視できない現実であり、ビジネスの競争が激化しているため、生産者は毎年の生産を安定させ長期にわたって果実の品質を維持できることが不可欠である。プラスチックフィルムは雨による被害を制御するのに効果的なツールであると確信している。ただし、この技術の使用に着手する前に、品種、システム的设计、地理的立地、及び各場所に特有の気象条件を常に考慮する必要がある。弊社の強みは、様々な気候条件の下での長年の経験と、様々なブドウ産地における品種の特性に関する知識である。」

イタリアにルーツを持つセトプラスト社は、プラスチックフィルムは1シーズン使った後で再利用できるとしている。「何年も使用してみた結果、3シーズン利用することが費用対効果の点でバランスがよいことがわかった。それよりも短い期間でシートを更新すると、費用が生産者にとって高くなりすぎる可能性がある。フィルムを年に数か月(2~3か月)だけ使用して保管するのであれば、4~5年使用できる可能性がある。そのため、格納式のシステム設計は、シートの操作とコストの削減に大いに役立つ。」

「主な問題は、このような平均180mmの雨が降るシナリオでは、問題を解決できる選択肢は多くないことである。これは、プラスチックフィルムが決定的な方法でビジネスを救える分野だ。」

執筆者: クレイトン・スワート

※ この翻訳は技術や産地の状況を紹介するためのものであり、特定の企業や製品を推奨するものではありません。